

「学校カウンセリング特論」(講師 國分康孝先生)まとめ その9

・学校カウンセリングの動向(2000.2.22.15:00-16:30)

・これからの学校カウンセリングはどう変わっていったらいいのか。日本ではロジャーズの影響が強く、しかも長い期間に及んだということが問題である。なぜ、それが問題かと言えば、受け身だからである。「去る者は追わず、来るものは拒まず」という姿勢であり、非行少年は来ないし、ノイローゼは放っておいても来るという考え方。これは教育場面ではなじまない考え方である。

・なぜ、日本人はロジャーズに心酔したか？ 権威主義を克服しようとするあまり、反動形成の形でロジャーズが広まった。ロジェリアンには、「自己一致、あるがまま」をキーワードにして、人を裁くという意識がない。甘えの強い日本人にはまさにピッタリの考え方であった。これからの学校カウンセリングを考えていく上での提言の第一は、「ロジャーズから足を洗え！！」ということである。

<これからの学校カウンセリング>

1. グループアプローチ(1対1だけがカウンセリングではないということ)

- ・グループカウンセリング
- ・グループエンカウンター
- ・グループワーク
- ・グループガイダンス
- ・グループラーニング 例：教師サポートの会
- ・サイコエデュケーション

・1対1は個人の利益になるのみで、全体には返らない。部屋での面接という誤解もある。医者 of 真似事に見える。教育者は医者ではないのだからグループを使う。

2. 能動的であるということ

・「社会化」が教育の本質である。「社会化」とは現実原則を学習させる。「現実原則」とは禁止や命令が含まれ、教育には欠かせない部分である。子どもが何かを「決めた」といっても両親の文化がそれを許容しない場合がある。そうしたときは、「君たちの現実世界の中で考え直せ」と突き返すべきである。

・ロジャーズ以降はだいぶカウンセリングも能動的、行動的になってきており、これが学校カウンセリングの特徴でもある。しかし、ロジャーズ風の考え方も必要であり、うまく調和させないといけない。

3. 価値観の開示

・昔、教員は価値観を開示してはいけないと言われていた。なぜなら、子供の表現や自由を奪うと考えられたからである。ロジャーズは「中立性(ニュートラルリティ)」、フロイトは「エンブティスクリーン(カウンセラーはクライアントの心を写す真っ白な幕であれ)」

を説いていた。ところが現代は価値観の定まらない子供やクライアントが多い。迫ってやらないとダメになる人が多い。

・実存主義のフランクルの逸話。「生きている価値観を見いだせない」と悩む男性クライアントに対して、「あなたが生きているということはお嬢さんにとってはとても価値のあることなんですよ」と説き、改善に向かったことがあるという。

・エリスは「価値観を出さないと解決できないこともある。しかし、その価値観の開示は人をダメにすることもよくすることもある」と述べている。

4. 簡便法(ブリーフ・メソッド)

・学校現場は忙しいので、少ない回数で改善に向かう方法であることがキーとなる。

・簡便法として役に立つのは、論理療法、行動療法、精神分析療法、交流分析である。逆に使いにくいのは来談者中心療法、ゲシュタルト療法。(ゲシュタルト療法はエクササイズで時間がかかる)

・簡便法への批判として、「問題は解けたかもしれないがパーソナリティの変容には至っていないので結局は治っていない」というものがある。パーソナリティチェンジを大目標に掲げているのはロジャース理論や精神分析理論であり、「事柄を問題とするな、人柄を問題とせよ」という言葉もある。

・行動療法の考え方では次々に行動が変わって行って、他にもいい影響が出てくるという。巷でいわれるほど、再発することもないという。

・アメリカで今、脚光を浴びているのは「ソリューションフォーカスト」であり、問題解決や症状の除去に視点をあてた取り組みである。

・現在、アメリカの学会でロジャースの分科会は閑散としている。悪口の一つに「何のサービスもしてくれない」というものもある。印象として、ロジャースの時代は去ったということが言える。

・ロジャースのブームは去ったが、その考え方は生きているというのがカーカフやアイビエの考え方である。

・現在のアメリカでは精神分析療法を行っている人は少ない。なぜなら、自由連想ゆえに非常に時間がかかるからである。そこで、精神分析的な心理療法といい、月に一回程度の面接を行い、治療期間も2年程度を目安に行うものが増えている。共通なのは「無意識を意識化すること、その手法として夢分析を取り入れる」ということである。違いは「自由連想」をとらないということである。

・教育の立場では「精神分析的カウンセリング」という。もとは神経症の治療から入ったものが人間関係へと迫る応用的なものになってきた。

5. チーム支援

・「保健室からの登校」(門田恵美子著)のアプローチが参考になる。

・病院では昔から、医師、看護婦、心理学者、ソーシャルワーカーなどがチームを組んで事に当たっていたが、教育現場ではそういう連携が弱かった。

・教育現場でも、例えば養護教諭、学級担任、スクールカウンセラー等の守備範囲はどこなのかをはっきりとさせて連携をとっていく必要がある。何でもかんでも相手任せでは子供にとって最適の支援は望めない。チームをまとめていくコーディネーター的存在は必要

であり，教育カウンセラーなどは今後そうした役割を意識してほしい。

6．リサーチ

・学校カウンセリングのリサーチが弱い。事実を明らかにし，事実に基づいたプログラムを作ることが大切である。これからのカウンセラーや教師は面接だけで改善していこうとするのではなく，科学者としての資質も求められる。以下に示すリサーチの種類の中で，学校カウンセリングのリサーチとしては，現在，事例研究までがほとんどだが，フィールドスタディ，エクスペリメンタルフィールドスタディまで踏み込んでほしい。

< 参考 > リサーチの種類

科学前研究（プリサイエンスリサーチ）

- ・何の仮説も根拠も統計もない。

事例研究

- ・サンプルも統計処理もないが，一つの事例から一つの問題を発見する。その後に役立つ観点が一番大切。それがないと「物語」になってしまう。一般原理を見出してくれないと困る。フロイトも「無意識」という観点を持って事例研究を行ったのでよかった。

フィールドスタディ

- ・サンプルも統計処理も行う。現場に出て行って実態を調べる研究をいう。中高生の進路の問題意識や友人関係，性格調査など様々に調査が可能。

エクスペリメンタル（実験的）フィールドスタディ

- ・実験の意味は統制群を作るということ。例えば，構成法と非構成法ではどちらが自己開示を促すかなどの研究がこれにあたる。研究者の土壌である。

部屋の中の実験研究

7．アセスメント

- ・実態把握も今後さらに大切な分野である。

8．学習カウンセリング

・学習面の遅れ等に問題を持つ子供に関して，どのようにカウンセリングを行うかも今後の大切な分野である。